## ――目　次――

1　発端　002

2　指南　一　036

3　指南　二　057

4　エピローグ　080

※この作品はフィクションです。
実在の人物や団体などとは関係ありません。

# 1

ライ・ゼルニコフ団長が公爵家のご令嬢と結婚した。しかも政略結婚ではなく、ご令嬢に申し込まれてのことらしい。世間では団長が気取ったプロポーズを送ったなどとまことしやかに信じられているが、実際は違う。げに真実は小説よりも奇なり、だ。

まあ、そこまではいい。

問題はそのあとだ。

ライ・ゼルニコフという男は戦場であれば輝かしい武功をいくつも立てられる人物だが、あっち方面はからっきしだ。

娼館に足を踏み入れたことすらなく、下ネタを交わしている暇があれ

ば戦術書や世界各国の剣術指南書に目を通す変わった人物だ。
変人と言っていい。
だがそんな変人だからこそ俺も他の連中も生き残っている訳だが、いかんせん女の抱き方すら知らない御仁に初夜は難しい。
天然の要塞を一日で落とせというようなものだ。
団長なら嬉々としてやるかもしれないが、いかんせん攻略すべき相手は要塞ではなく女体である。
恋愛経験クソザコ野郎を地で行く団長には荷が重すぎる。
かといってこのまま公爵家の血が絶やされる事があっては一大事だ。
なにせかの公爵令嬢は公爵家の一人娘であり、今や団長が公爵家の入婿という立場だった。
王国南部に広がる肥沃（ひよく）な大地の持ち主が跡継ぎ不在となれば、国内に

いらぬ紛争が巻き起こる。
それは団長も避けたいはずだ。
だからこうして俺にお鉢がまわってきた訳なのだが……。
思い返してみてもあれは団長にとって、屈辱の選択だったに違いない。
『――副官として付き合いの長いお前にしか頼めんのだ……』
まさに悩みに悩み抜いた末、恥を忍んで俺に『指南』を頼み込むお姿は、戦場で見せる凶悪さが嘘のように消極的なものだった。
御年三十三歳。俺より四つ年上だ。
眉間にシワを刻んだ顔はまさに不覚……！と言わんばかりで、この事態に納得していないのが口元からありありと見て取れた。
エルフの血がほんの少し混じっているせいか、団長の肌は血管が透けて見えるほど白い。とがり気味の耳にかけられた金髪は絹糸のように柔

らかく、顔を近づけられるとほんのり甘い香りがする。
そのくせお堅いきまじめな顔を常に浮かべていて、この外見に騙されたら最後、戦場で悲惨な目に遭うことを俺、いや俺たちは嫌という程知っている。普段の訓練で身をもって体験しているからだ。
しかし戦場では悪鬼となろうとも、女の前では形無(かたな)しであることに変わりはない。
なんでも結婚以来、公爵家ご令嬢とは手つなぎのひとつすらまともにできていないという。
そんな女経験ゼロ、むしろマイナスに振り切っている団長に何が哀しくて、平民出の娼館通い独身男が手ほどきしてやらねばならないのか。
(あの時なんでああ言っちゃったかなぁ)
今思い返してみても頭を抱えたくなる。

小首を傾げ、不安そうに俺を見つめる眼差しにクラっと来てしまったのだ。
いつもキビキビと動き、戦場ではみずから先陣を切る男にお前だけだと頼られるのは、ものすごく心のそそられる体験だった。
俺が団長に教えこんだことが全て団長の中の常識となる――
こんなに男心くすぐられる体験があるか？　いや無い。
俺が優位に立つことは一生ないと思っていた人物に一から手ほどきし、無知であることを利用して、思いのままにエロいことを教え込む。それは俺の雄を嫌でも刺激した。
結果、
『誠心誠意教えこませて頂きますっ』
そう答えて、今夜団長と二人きりで過ごすことになった。

仕方がない。
男とは誘惑に弱い生き物なのだ。
そう割り切ることにして、俺は今夜のための準備を始めている。
まずスライムオナホ。
女に挿入することがどんなに気持ちいいことか学んでもらう。あの堅物の団長がどんな顔をしてこれを入れるのか考えただけで今から楽しみだ。
続いて尿道プラグ。
男の体の気持ちよさも学んでもらうべきだろう。尿道という敏感で繊細な細い管をトロトロの柔らかいコイツでいじられたら、あの悪鬼も簡単に陥落する。はずだ。
さらにオーク型バイブ。

ドリル型の一物を持つオークの形を模したバイブだ。こいつはクルクルねじれた螺旋がちょうど男の前立腺に当たるようにできている。小さな段差で前立腺を挟んでやると簡単に男でもメスイキできる。
女をイカすならその気持ちよさを自分で先に味わっておかないといけない。
「最後はやっぱり声だな」
愛のこもった喘ぎは夫婦の初夜に絶対必要だ。
情がこもるからこそ真実の愛も育まれるというものだ。
いまだ結婚できておらず、恋人すら作れていない甲斐性なしの俺だが、セックスの時に喘ぎ声を聞けば相手がどれほど自分を愛してくれてるか分かる。金でつながった娼婦でも、それは例外じゃない。
愛とまではいかないが、好かれているかくらいは息づかいで大体分か

る。
それを団長にもきちんと説明しておかなくては。
（まあ、団長の息づかいは聞いたことあるけど）
耳をつんざく魔力砲の砲撃が行きかい、悲鳴と怒号が響きわたる戦場でだったから、愛情とか好意なんて二の次だったが。
そうした諸々を全て今夜、教えこまねばならない。
俺は自室の机に必要なアイテムをきちんと並べ終えて、もう一度使用に問題ないか入念なチェックをする。
今夜のためにどれも新品を集めた。
スライムオナホは伸縮性の高い高級品にしたから、きっと団長のお気に召すことだろう。透明な色合いのため、ナカのひだひだもばっちり見える。視覚的にも団長を興奮させられること間違いなしの一品だ。

「よし、頑張るぞ俺」
皮袋に準備した品を詰めこみ、団長の寝所へと向かった。

◇　◇　◇

団長――ライ・ゼルニコフの寝室は騎士団の詰所の一角にある。
王都をぐるりと囲む城壁がそのまま詰所であり、俺たちの団は北門一帯が担当だった。
東西南北四つの城門があり、任される地域によって序列が存在する。
なかでも北門は国王陛下の住まわれる後宮に最も近いため、騎士団で最も精強かつ武勇に秀でた騎士団にのみ任される。
他の団員にやっかまれる事も多いが、正直俺は北門が嫌いだ。

なにせ寒い。ものすごく寒い。
冬になれば北の山脈から寒冷な空気が直撃し、夜から朝にかけての詰所は火を焚いてても底冷えする寒さが消えない。
できれば日当たりの良い南門の詰所で暮らしたい。
北門の詰所で夜を明かした経験がある騎士なら一度は考えることだ。
まあ、国王陛下の命を守る気概がない不敬な騎士と思われたら困るため、仲間内以外で口にしたことはない。
「団長の部屋も寒かったらどうしよう……」
いや、ヤってる内に温かくなるから問題ない。だが寒すぎて勃たなかったら、それはそれで困る。
仕事で立ち寄ることの多かった執務室の気温を思い出そうとするが、いかんせんこれからやることにばかり意識が囚われて、うまくいかない。

うんうんと唸っている間に、とうとう目的地に着いてしまった。
夜十時。
団長の執務室がある廊下はひっそりと静まりかえっていた。石壁に掛けられたロウソクがチリチリと燃えて、時おり炎が揺らめく。暖かな光に俺一人分の影が照らされて、なんとも心もとない。
手に持っているのは大人のオモチャ満載の皮袋。
実は全部夢なんじゃないかと思えてしまうくらい、リアリティがない。
執務室の扉をノックすると、「入れ」と聞きなれた声が響いた。
「失礼しま～す」
おそるおそる入ると、執務室の火は落とされていた。代わりに右手奥の部屋が開いていた。
柔らかい光がほんの少し開いたドアのすき間から漏れている。きっと

ここが彼の寝室だ。
入室前に気になっていた部屋の寒さなど一気に頭からたたき出される。
ゴクリと周囲に聞こえるほど大きな唾を飲みこんで、奥へと進む。
「団長、そのう、今夜は簡単なところから始めようと思いましてね。俺も一応便利なアイテムを持ってきたんですよ。まあ団長が気に入るかは分かんないんですけど、緊張をほぐすお遊びグッズと言いますか」
馬鹿いえ。緊張しているのは俺の方だ。
次から次に言葉があふれて止まらない。しゃべり続けていないと心が落ち着かない。
ふと妙な香りが漂っていることに気がついた。
（……甘いこもった匂い……？）
砂糖菓子のように甘ったるく、それでいて奥深い香りだった。

団長が王宮に出かける時につける香水とは違う。だが、どこかで嗅いだ記憶がある。あれはどこだったか……。

寝室のドアを開くと一気に匂いが濃くなった。

（これはまさか――）

気づいた時にはもう遅かった。寝室のベッドには前かがみで座りこむ団長がいた。顔にはうっすらと汗をかいていて、白い頬はリンゴのように真っ赤に染まっている。

薄い唇は必死に体内からせり上がる何かに耐えるよう、キツく引き結ばれている。

（催淫香じゃねえか……ッ）

しかも濃度が異様に高い。娼館でさえここまで高いものは焚かないだろう。

「ずいぶんと遅かったな」
団長はナイトガウンの襟元をたぐり寄せて、恨めしそうに俺を睨んでくる。
だがサファイアを思わせる瞳は潤みきっていて、怖いというより色っぽかった。
「すみませんね。お待たせしちゃったみたいで」
こんな香りのなかで待っていたら数秒で高ぶり、射精したくなるだろう。事実、俺のムスコもどんどん反応し始めている。
しかし団長は律儀にも俺をじっと待っていてくれたらしい。この分だと射精を我慢したまま。
「あー……とりあえず一回ヌきましょうか」
団長の隣に座ると、びくりと団長の肩が揺れる。怯えているようにも

見える仕草に、ぞくぞくした。
あの剣鬼と畏れられた男が、俺が隣に座っただけで震えている。まるで生まれたての小鹿みたいにぷるぷる震える姿は、火照った顔に相まって俺を誘っているように見えた。
大人のオモチャ満載の皮袋を置いて、団長の手首を掴んだ。隠していた股間をさらすと案の定ふくらんでいる。
「……ゃ、待て……」
弱々しい声に、また背筋がぞくりとした。自然と鼻息が荒くなる。襟元の奥には飴色に照らされた素肌が見える。無防備にもナイトガウンの下は何も着ていない。きっと今夜することを見越してなんだろう。
じゃあ下は？
どくどくとやかましいぐらいに音を立てる自分の鼓動を耳にしながら

ガウンの裾をそっとめくった。
なまっちろい太ももが見えた。鍛え上げられた筋肉とは裏腹に一切、日に焼けていないため艶めかしい。
（うわ……えろッ）
さらにガウンをめくる。ふくらみきった股ぐらまで引っ張りきると、紺色の下着が現われた。
「ッ……!!」
団長の息を飲む音をしっかりと記憶する。
ぷっくりとふくらんだ先の中央――紺色の布地に濃いシミができていた。
剣鬼と畏怖されている男がたかが催淫香の匂い一つで勃起している。その事実に俺はかつてないほど興奮した。唇がつりあがり、上司と部下

という関係すら忘れて、団長を辱める言葉を口にした。
「あーあー、今すぐ出したそうにしてますね。団長のおちんちん」
「ッ」
「下着はいたままだと出すモノも出せませんよ。俺が下着おろしてさしあげましょうか？」
そっと下着に指をかけて引っ張ると、団長のおちんちんの形がさらにくっきりとなった。
小さい。
俺のと比べて三分の一くらいだろう。
あの剣鬼と畏れられた男のチンコが俺の半分以下だなんて、見ているだけで興奮する。
「どうです？　部下の指で扱かれるのも案外気持ちイイですよ？」

「――いぃ……ッ！　自分で下ろす……ッ」
団長が下着に手をかけるが、こんなこと初めてなのだろう。きれいなお顔が羞恥心と屈辱に染まる。きっと今団長の心のなかでは、俺にチンコを見せるかどうか、大きく葛藤している。美しい柳眉が波打って、下着を脱ぐかどうか揺れていた。
（ま。抵抗されても脱がすけど）
興奮を隠したまま俺は団長の手を押しのけて、先走りで濡れた下着をずり下ろした。
「はい。ご開帳～っ♡」
ぴゅるんっ♡
紺色の柔らかい生地から可愛らしい形のおちんちんが姿を現した。
（皮かむりとか、マジかよ……っ！）

現われたおちんちんは先っちょが皮をかぶっていて、子どもみたいに瑞々しい鴇色だった。先っちょから垂れた先走りによって竿がヌラヌラと光っている。

玉は小ぶりで下の毛は薄い。生えていないようにすら見える。ちぢれ毛で隠れるはずの根元が丸見えだった。

苦しそうにそりかえった姿がまた可愛らしい。

（やべ。オナホやるより俺がまず扱きてぇ）

ちんちくりんな性器の細さ、体温、ナマの指でふれたら団長がどんな顔を浮かべるのか、想像しただけで俺もイキそうになる。

ぶっとい指でこのほっそい竿をこすりあげたらどうなるのか見てみたい。

「苦しそうだからまず手でヌいてあげますね」

「……は？　手？」
その反応で直感した。
この人、絶対オナった経験ゼロだ。オナニーのオの字すら知らない。
なら俺が懇切丁寧に手ほどきしてやるべきだ。
今後、女の抱き方を知ったら絶対に自慰を我慢できなくなる。その前に俺が団長にやり方を教えてやるのだ。
なにせ今夜は俺が団長に『指南』する夜だ。セックスの気持ちよさを俺が叩き込んで何が悪い？
人を食った笑みを浮かべながら団長の耳元に言葉をそそぎこむ。
「こういう時、チンコを手で扱くと落ち着くんですよ。ほら、いっちに。いっちに♡」
親指と人さし指でぶっとい輪っかを作ると、すぐさま根元までズリ下

ろした。

「――んンっ !!」

竿を指でしごかれるのも、他人の、しかも部下の男にさわられるのも初めてなのだろう。必死に声を我慢する姿がいじらしい。

でもどこまで我慢できるかな？

く――ぢゅぅぅう♡♡

今度は下から上へ輪っかを引きずり上げ、皮をかぶった亀頭をほじるようにクリクリと輪っかを回した。

「可愛いですよ。団長のおちんちん。このまま大人チンコに変身させてあげますからね」

亀頭の中ほどまで覆っている皮に指をかける。爪は立てず、指の腹をつかってゆっくりと優しく、丁寧に薄い鴇色（ときいろ）の皮をめくり下ろしていく。

「ほら団長の亀頭、見えちゃいましたよ♡」
ぷるん♡
艶々として瑞々しいカタチが見えた瞬間、団長が俺のすぐそばで悲鳴を上げた。
「ひっ……ぁ……クッ、うぅ――ッ」
「おら、とっととイケ」
主従の関係など忘れて、細い竿を猛然としごく。小さな睾丸をもう片方の手のひらで揉みしだいてから、亀頭を押しつぶすように手のひらでくるんだ。
にぢゅ♡にぢゅ♡にちゅゥゥウウ♡♡
「っ、やめ……ろ……ッ！　だめっ！　だめ――ェェ!!」
ぴゅく、くくくっ♡

団長がイった。あの団長が、戦場では悪鬼だの剣鬼だのと畏れられた人が、俺の指ひとこすりで射精した。
興奮しないはずがない。
そのまま竿をガッチリと掴むと、手のひらも使ってさらに激しくこすりあげる。
「まずはたくさん精子出せるようにしましょうね。団長のおちんちん、大人にしてあげないと」
「ハッ……ァ……ッ……待てッ、その手をとめろ……ッ」
「こんな皮かむりちんちんで奥さん抱ける訳ないでしょ。ほら、玉袋もにぎにぎして大人精子出せるようになりましょうね」
やべ。興奮してきた。
この人が悪い。あれだけ戦いでは勇ましい姿を見せていたくせに、俺

たちを散々しごきあげてたくせに、その身体はこんなに可愛かったとは。
しかもこの皮かむりお子ちゃまちんちん。
いじめてやりたくて仕方がない。
団長に恨みはないが、戦場での落差があまりに大きすぎる。ほれぼれとする程の速さで魔獣を一刀のもと切り伏せてきた団長が、実は性知識ゼロ。興奮しないほうがおかしい。
思ったよりも細い腰を引き寄せて、勝手に尻を揉む。
素股もいけるな。このケツ。
もはや『指南』を忘れて、団長の身体を貪りたかった。まだ何も知らない処女雪みたいなこの身体を俺の知識とやり方で染め上げて、俺なしで生活できないようにしてやりたい。
（絶対俺のモノにする）

決意を新たに、手コキを初体験した団長にささやく。
「とりあえず射精のしかた覚えさせちゃいましょうね。この赤ちゃんちんちんに。ほら、しーっ♡　しーっ♡」
「ぅン……っ　!!　やぁぁアアア　!!」
ぴゅるるるるっ♡♡
ちょっと竿を握りしめるとおもしろいほど簡単に精液が床に飛ぶ。透明な液体がカーペットに飛んで濃いシミをいくつも作る。
何回飛ばしてやっただろう。部屋は催淫香と団長の出した精液の匂いが混ざり合い、嫌でも俺の興奮を煽る。
先走りで済んでいるのが奇跡だ。
催淫香のお陰か団長の竿が萎える気配は全くない。
（もぉ無理。我慢できねぇ）

団長の腰を持ち上げて立たせたあと、大股開きで座る俺の股ぐらに座らせた。
案の定柔らかい尻が俺の股間に当たる。
「ァ、や……なんだ、この、硬いのは……ッ」
「すみません。団長が焚いてくれたお香のせいで俺も反応しちゃいました♡」
ちゃめっけたっぷりに言えばこの人が強く出られないのを、俺はよく知っている。
一度自分の懐に入れた人間にはこっちが心配になるほどこの人は甘いのだ。そこに惚れこんでいる連中も多い。
だが今夜それを利用させてもらうのは俺だ。
団長にプロポーズして妻の座を射止めた公爵令嬢でもなければ、権威

を嵩(かさ)に無茶な命令をくだす上流貴族たちでもない。
俺だけが今夜この人を独占できるのだ。
「っ……ァ……、尻に当たって、きもちわる……ィ」
「そんなこと言われたら俺、傷つくなあ」
これみよがしに泣き真似をすると、団長が慌てて謝ってくる。
「す、すまない……初めてだったから――ッ」
こういう身内には素直なところが実に心配だ。
俺はベルトをゆるめて、ズボンと下着ごと引きずり下ろした。
バッキバキに勃起したチンコのお出ましだ。
雪のように白いケツがまるでたぷたぷと揺れるおっぱいのようで、さらに硬くなる。
「団長の下着邪魔だから脱がしますね」

そもそもナイトガウンの下に下着一枚しか身につけてなかったことと言い、今夜の団長は俺を誘っているとしか思えない。

精液で濡れそぼった下着をこれみよがしに団長の目の前でチラつかせた。

「奥さん抱けなくて溜まってたんですね。ほら、団長の出した精液で下着べっちょべちょ。この量は娼館通いの俺でも引きますよ」

「なっ！　それはお前が――！」

「分かってますって。俺の指南待ちきれなくて、催淫香直焚（じかだ）きしちゃったんですよね」

「直焚き……？」

「ふつうは三分の一の量でいいんですよ。まさか団長がこんなにセックス好きとは思いませんでした。お陰で俺のチンコ、バッキバキなの分か

ります？」
腰を掴んで、尻肉に直接俺のチンコを挟んでもらう。当然アナルにも竿が当たるように。
「ゃ、うそだ……ちがう……ッ……商人からあの量だと私は聞いて……ッ！　ッ！」
必死に唾を飲み込み羞恥を耐え抜く姿がいじらしい。
（俺のチンコ当たってるせいで、ちんちんピクピクさせてる。かっわい～♡）
「俺が一回素股でイかせてもらってる間、団長は女の子のアソコがどんなにトロトロで気持ちいいか学びましょうね」
皮袋からようやっとスライムオナホを取り出した。透明な筒は中身が丸見えだ。大量の柔らかいつぶつぶが三六〇度ぐるりと内側に張り巡ら

されている。ロウソクの明かりで妖しい光を放っていた。
「まて、今はまだ――ッ」
「だーめ」
にゅぷぷるぷぷぷっ♡♡
根元までオナホをはめ込み、片手でぎゅっと搾ってやると団長の細腰があっけなく震えた。
ぴゅううう♡♡
うわ、入れただけで射精してる。
小刻みの振動が尻肉にも伝わり、俺のチンコを挟んでくれている尻の割れ目がおもしろいほど何度も柔肉を押しつけてくる。
「ッ、ァ、ひッ――これッ、いや……だッ」
「なに言ってんですか団長。ほらちゃんと見て下さい。男が射精すると

こんな風に精子がナカで逆流するんですよ。団長のお子ちゃま精子がひだひだに浸透してってるの見えます？　これを奥の子宮口に全部ぶちまけてあげないと子どもはできないんですよ。もっと深くおちんちんはめこんであげますね」

ぷ――ぢゅぅぅぅぅ♡♡

オナホの形が変わるほど握り込み、最奥まで竿が届くようにくっつける。団長の皮むけちんちんの先っぽがもっと射精できるように、クルリと回転させてやる。

ぐぃんっ♡ぐぃんっ♡♡ぐりゅ――んッ♡♡

「――ッ!!」

声にならない艶やかな悲鳴が寝室中に響きわたった。

「はい、じゃあ喘ぎ声のレッスンしましょうね。可愛い声で啼かないと、

奥さんも愛あるセックスしてもらえてるって感じないから、とびっきり愛らしい声で啼きましょうね」

にゅぷぷ♡ぱちゅん♡ぱちゅん♡ぱ――ぢゅぅぅぅう♡♡

何度もしつこくオナホを押しつぶす。そのまま半回転させると団長の背中が思いっきりしなった。気持ちよくなってる証拠だ。一回、二回、三回。

愛くるしい喘ぎ声が出るまで、何回でもオナホをまわし、押し曲げては、ひねる。

「おら、啼け」

耳元で囁いた瞬間、団長の声が変わった。一気に色めいて、花ひらく。

「――や、……ッ……だめぇぇぇえええ♡♡」

初めてのメス喘ぎ。ハートが乱舞するような悲鳴に、俺も堪らなくな

って、団長の身体を後ろから強く抱きしめる。硬くなったチンコに団長の尻肉がくい込む。

（うわ。もうこれ、ぱいずりだろ――ッ）

そのままありったけの精液を放出する。

ぶびゅるるるるる♡♡

ねっとりとした液体を団長の尻肉に噴きつけ、アナルにも竿を使って塗りつける。そのまま亀頭を団長の玉袋のすぐ下にスライドさせ、まだ噴き出し続ける精液をカーペットに吐き出した。

すでに床にできていた団長の精液の水たまりが、俺の精液に塗りつぶされていく。催淫香のせいでい量が多い。簡単にやれた。

その光景は雄としての征服欲をたっぷりと満足させてくれた。

「ぁ♡　……ゃア♡　オズノフ――ッ♡」

ここで俺の名前を呼ぶかよっ。
またチンコが硬くなる。
団長の身体を後ろから抱えこみ、とがり気味の耳元へ囁く。
「じゃあ次のレッスン行きましょうか」
団長の返事を聞くより前に俺は皮袋から新たなアイテムを引きずり出した。

## 2

もう何が何だか分からなかった。

副官オズノフの言うとおりにしていれば有能なヤツのことだ。短時間で的確な説明をしてくれて終わるものだと思っていた。

それなのに今、団長である自分はヤツの股間に座らさせられて、尻にはヤツの一物を挟まされている。

ヌルついた精液が尻にくっついて気持ち悪い。床にはヤツの出した精液が、私の出した量を上回る勢いでぶちまけられていた。

（いいや、しかし……女性のカタチを教えてもらったならもう、何もないハズ……）

催淫香の件は私にも非がある。妻アニエスが贔屓（ひいき）にしている商人から買ったものだったから油断した。もしかしたらあの商人も相手が妻だと思って、量をはずんでくれたのかもしれない。

オズノフには申し訳なかったが、窓を開けてしまえば簡単に効果は切れる。

それで今夜のレッスンは終了だ。

そう思っていたのにヤツは私の身体を離そうとしてくれない。

何やら片手でゴソゴソと皮袋の中身を漁っている。

（まだ何かあるのか……？）

今までの方法だけでもなかなか覚えられないのに、これ以上課題を追加されては男としての自信がなくなる。

なによりもこの……太さ。さっきほんの少しだけ亀頭が見えたが、私

のモノと比べたら全くカタチが違い、猛々しかった。何よりも尻に直接感じた竿の硬さや太さは尋常ではない。
ほかの男たちも皆あんなサイズなのだろうか。
自分の性器が他の男と違うとは感じていたが、こうして現実として突きつけられるとやはりつらかった。
「オズノフ。その、今夜は――」
もう終わりにしようと言いかけた瞬間、ヤツは革袋から細長い棒を取りだした。
かなり柔らかいのかヤツが持ち上げただけで、先っぽがぷらんぷらんとはね返っては揺れている。
こんな極細の棒の使い方など全く思いつかなかった。
「コイツは尿道プラグと言って、団長のお子ちゃまちんちんを一気に大

人チンコに成長させてくれるんですよ」
「誰がお子ちゃまだ……ッ」
成人を迎えても一向に皮の剥ける気配がなく、手を使わないと亀頭が姿を見せてくれない己の性器が昔からコンプレックスだった。
そのせいか着替えを誰かとともにすることは無かったし、身体を洗うときも一人で手早く済ませてきた。
団員たちの皮かむりしていない立派なモノを見かけるたび、自分の身体に何度となく劣等感を覚えた。
どうにかしてこの溝を埋めたい。
そのために別のことで男らしさを求めた。
剣の道に突き進んだのはそれが発端だ。そこに元々の才能も加わって、貪るように戦いでの勝利を求めた。

どんな苦境に立たされようと、勝ち残った男はそれだけで強い。
勝利を掴む人間にこそ敬意は払われる。
だからこそ部下を死なせないために戦術書や軍略書を読み漁り、鍛錬に励み、厳しい訓練を与えてきた。
その甲斐あってか、王国の近隣に現れる魔獣の影はここ数年なりを潜め、畑の作物が荒らされることが激減した。人死にも減り、騎士団の精鋭ぶりに他国からちょっかいを掛けられることも減った。
王国全体が豊かになり平和な時代がやってきた。そんななか公爵家の令嬢アニエスに結婚を申し込まれたのだ。
これ以上の良縁はないと両親や親戚に祝福され、気づけば彼女の夫となっていた。しかし彼女と初夜を迎えるということは、長年己の劣等感を煽ってきたアレを彼女に見せるということでもあった。

（彼女にこんなモノ……見せられない）

公爵家でもその気性の荒さから剣姫と言われる彼女だが、正直あのツンツンとした感じは、悪くない。剣の腕に覚えがある男たちが勝負を挑んでくる時の雰囲気に似ている。むしろ気に入ってすらいた。愛、とまではいかないが好ましいと思っている。

だが、この長年自分を苦しめてきたものを彼女に晒（さら）すのは怖かった。夫婦として対等な関係に亀裂が入る気がしてならない。

私とて男だ。彼女をリードできる人間でありたい。

だからこそ女経験も豊富で、口の固い副官――オズノフに今回の指南役を頼んだのだが、事態は妙な方向に向かっている。気がする。

「今夜はこれくらいにして――」

「駄目です。団長には閨（ねや）での振る舞いをしっかり覚えて帰ってもらいま

す。そうしないと奥さんにいくじなしって言われちゃいますよ？」
それは避けたい。
ただでさえ地位の差が激しい結婚なのだ。地方出身の騎士が公爵家の令嬢を見事いとめた、と市井では美談として語られるが、正直アニエスの所作や領地運営の見事な手腕に見惚れてさえいる。
能力で成り上がってきたせいもあるだろう。
私にはもったいない妻の隣に立ち続けるには、結局このコンプレックスを乗り越えなくてはならない。
それは分かっているのだが、どうにも恥ずかしくていたたまれない。
「時間かかりませんから。ね？」
そう言われると心がぐらつく。今夜一回で終わるならオズノフも楽だろう。

「……分かった」
ヤツがにっと笑った。この人なつこい笑顔を見せられると、どうにも憎めない。
ゆっくりとオナホが抜かれていく。私の竿に容赦なく食い込んでいたつぶつぶにはべっとりと精液がついていた。
（ッ!! ……）
副官であるヤツに見られたと考えたら余計に羞恥心が増した。
そしてオナホの代わりに今度は黒い極細の棒が私の性器にあてがわれる。
（ぇ……まさか）
細い棒が入れる穴といったら、その先には尿道しかない。おしっこと精液が噴き出す穴を今度はいじくり回されるということか？

「待て！　オズノフッ。そんなの入らな――」
「はい。団長の尿道ご開通～♡」
ヌ――プププッ♡♡
柔らかい極細の棒が尿道の管に侵入してくる。初めての体験に衝撃を受けすぎて身体が動かない。こんなことは初めてだ。
大型魔獣を前にしてもこんなことはなかったのに。
（たかだか細い棒程度に――ッ♡）
「お。初めてにしてはイイ反応♡　そんなに気持ちいいんだ。じゃあもっと奥まで突っ込んであげますね」
にゅぷるるるる♡♡♡
尿道プラグがさらに奥へと押し込まれ、敏感な尿道に初めての快感をもたらした。普通ならあり得ない場所を細い棒でほじくられる感触。こ

のまま行けば精子をつくる場所までたどりつかれる怖さ。
「やっ♡　オズノフ、抜け……ッ♡　抜いて……くれッ♡」
「だ～め。このプラグは俺がちょっと魔力通すだけでカタチを自由に変えられるんですよ。例えばこんな風に一部分だけぷっくり膨らませたり――」
ぷちゅん♡♡
直線だった棒に変化が生まれた。ごく小さな突起が生まれ、敏感な尿道に新たな衝撃を与える。
「――ッ♡　っ♡　ッ♡♡」
声にならない悲鳴が上がった。
耳元でオズノフに、可愛いメス喘ぎと罵られる。
（こ、いつ――誰がメスだッ）

ヤツを睨もうとするがうまくいかない。
挿入されたプラグのカタチがほんの少し変わるだけで、体内に凄まじい快感がひた走り、繊細で敏感なポイントをいじめてくる。
早くダしたい。射精(だ)したい。イきたい!!
けれど穴はプラグで塞がれていて、一滴も出せない。
「すげ。団長の背中めちゃクソしなってる。感じてくれてるんですね。カワイイ」
「カワイイも、クソも……あるか……ッ」
命じるがオズノフが応える様子はなかった。
「だーめ。ココからが本番なんですから。この入った状態でプラグくりくり回したらどうなると思います？　団長の尿道」
「――ッ」